

高齢者介護における人間関係と家族介護者の精神的健康

唐沢 かおり (karasawa@l.u-tokyo.ac.jp)
〔東京大学〕

Interpersonal relationship and psychological well-being of family caregivers for elderly persons

Kaori Karasawa

Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo, Japan

Abstract

This paper considers the impact of the quality of interpersonal relationships on psychological well-being of family caregivers for elderly persons. First, the paper reviewed the studies on the measures for care-giving burden and argued that the burden and depression of the caregivers were generally associated with the perception of negative family relationship. Second, the paper considered the importance of social support on the psychological well-being and argued that the good quality of interpersonal relationship contributed to psychological well-being of caregivers by increasing the opportunities to obtain social support. Third, the paper reviewed the studies that suggest the negative effect of intimate family relationship on psychological well-being of caregivers. These studies mostly argued that the intimate relationship increased the commitment to family caregiving and consequently, family caregivers were likely to hesitate to utilize various professional services for caregiving. Forth, the paper pointed out that social support may have negative impact on the recipients' psychological well-being, such as arousing guilt feeling and decreasing self-esteem. Finally, it was argued that research exploring the social cognition processes, particularly the inference of intentions and dispositions in caregiving situation were needed.

Key words

care giving for elderly persons, interpersonal relationship, psychological well-being

1. はじめに

日本における高齢化は、さまざまな社会問題をもたらしているが、その中でも重要なものの一つが、高齢者を介護する家族の精神的健康であろう。日本の福祉政策は、介護保険が制定されて以来、高齢者の在宅介護を促進する方向に進んでおり、介護負担が家族の上に大きくのしかかっている。したがって、高齢者を介護する家族の精神的健康にかかわる要因を検討することは、日本における高齢者介護を考える上で、最も重要な問題の一つといえよう。家族介護者の精神的健康については、福祉や医療の現場でもさまざまな議論がなされているが、「精神的健康」の規定要因という観点からこの問題を論ずる場合、一般的な社会生活の中での幸福感、満足感と人間関係の関係を扱った研究を取り上げ、主に社会心理学の領域で蓄積されてきた知見を参照しながら、考察を進めることができる。

わたしたちの多くは、この社会の中で幸せに、満足感をもって暮らしたいと望んでいるが、幸福感、満足感に影響を与えるさまざまな要因の中で、最も重要なもののひとつとして、「人間関係」をあげることができる。社会生活の中で、日常的に経験する幸福や不満感、また、ストレスは、人間関係の良し悪しによっておおきく左右される。一般に、望ましい人間関係を持っている人はそうでない人に比べて、身体的に健康であると同時に、生活に対する満足感

が高いことが、多くの研究から明らかになっている（たとえば、Berkeman & Syme, 1979; Ross, Mirowsky, & Goldseen, 1990; Strobe & Strobe, 1993を参照）。このような結果の背景には、第一に人間関係そのものがストレスの源となりえることがあげられる。

また、人間関係と幸福感、満足感との関係を解釈するもうひとつの視点として、私たちが、人間関係に基づいて生活する上で必要な社会的支援（social support）を得ていることが指摘されている。社会生活のさまざまな局面で困難に直面したとき、他者との関係は、生活に必要な物資、情緒的な支援、情報などを得る基盤となる。そして、社会的支援の質や量、また、その有効性が、支援する人とされる人の人間関係に大きく依存することが示されているのである（Dakof & Taylor, 1990）。良い人間関係を数多く持つことは、良質の社会的支援を得ることにつながるがゆえに、社会生活において良好な人間関係を保持していることは、個々人の必要を満たすために重要であり、精神的健康を促進することになる。

このような社会生活一般における人間関係と精神的健康との関係は、高齢者介護場面でも同様であると考えられる。後で詳細に論ずるが、介護負担感研究では、家族介護者の経験する鬱などのストレス反応が、高齢者や家族との人間関係が悪いほど強くなることが示されている。また、社会的支援研究では、良好な人間関係から効果的な支援が得られることが論じられている。すなわち、両領域における研究が基本的に示しているのは、「良い人間関係が介護場面でも、家族介護者の精神的健康の維持に重要」という

ことなのである。しかしながら、良好な人間関係が常に望ましい結果をもたらすとはいえないことも、また明らかになってきている。家族介護場面での良好で親密な関係は、かえって介護場面で経験するネガティブ感情を増幅したり、家族の手による介護へのこだわりや、「介護の抱え込み」などの望ましくない側面を生み出したりすることが示唆されている。

ところで、高齢者介護場面の問題を考える上で、人間関係に関する変数に着目することは、介護場面对人相互作用の場として位置づける視点とも合致する(唐沢, 1998)。従来、高齢者介護場面は、第一義的には介護行為がやり取りされる場として捉えられてきた。そして、適切な介護のあり方や介護の効果、介護行為が家族介護者にもたらす影響などが研究テーマとして取り上げられてきた。しかし、介護場面は単に介護行為の場ではなく、そこでさまざまな対人行動が行われる場でもある。つまり、介護者と非介護者の間で行われる、介護行為を含んだ相互作用を通して、介護以前に存在した人間関係が継続して影響を持つ場として位置づけることも出来るのである。したがって、人間関係に焦点を当てた分析、すなわち、人間関係に関する変数が、家族介護者の精神的健康に影響を与える影響を、さまざまな観点から検討することは、介護場面对人相互作用の場であるという視点に立てば、よりいっそう重要なテーマとなる。

では、人間関係に関する変数の役割を分析する際、人間関係のどのような側面に着目するべきであろうか。まず、着目する関係についてだが、高齢者介護場面では、介護される高齢者と主たる介護者を軸に、その家族、ケアワーカー、介護者の友人などが主にその場面に関与する。家族介護者の精神的健康を考えるという本稿の主旨から、ここでは、家族介護者を中心に置き、高齢者、家族メンバー、友人など、介護者を取り巻く人たちとの関係を問題にする。また、それらの関係を問題にするに当たって、基本的な関係の質に関する特性(良い-悪い、緊密-疎遠など)に主として着目する。介護場面での人間関係の特性をどのように概念化するか自体、研究対象となりうるテーマであるが、従来の多くの研究は関係の特性の詳細な分析に基づいているのではなく、「良い-悪い」などの基本的な特性を問題にし、その上で、特性がどのように介護場面の意味づけに影響するのかを検討しているからである。

2. 介護負担感研究

まず、最初に、介護負担感研究で人間関係がどのように扱われてきたのかを展望したい。介護負担感研究は、最初、負担感を測定する尺度作成研究を軸に、負担感の構成要素、または規定要因を明らかにするという形で進められてきた。たとえば、初期に提出された代表的な負担感尺度である Zarit, Reever, & Bach-Peterson (1980) の尺度では、高齢者と介護者の関係を評価する項目が取り上げられているし、Montgomery, Gonyea, & Hooyman (1985) が作成した複数次元尺度では、介護が人間関係に与える影響や、人間

関係の評価が項目としてあげられている。

また、尺度作成研究が展開する中で、負担感の規定要因を検討する枠組みとして、Lazarus & Folkman (1984) のストレス理論を導入した研究が進められてきたが、そこではどうであろうか。ストレス理論モデルは、介護状況や出来事の認知評価が、ストレス反応としての身体的、精神的な負担感につながるというものである。ここで重要なのは、出来事そのものの「強度」ではなく、当事者が、出来事をどのように主観的に評価するのかがストレス反応を決めるということである。このように主観的评价が重視されるモデルにおいては、人間関係の良し悪しのような、当事者の主観的评价にかかわる変数が、いっそう重視されることになる。実際、ストレス理論に依拠した介護負担感研究では、人間関係をストレスサー、またはストレス状況と反応との媒介要因として重要視する。たとえば Perlin, Mullan, Semple & Skaff (1990) は2次ストレスサーとしての家庭内緊張や、媒介要因として援助の有無を負担感の要因として取り上げている。また、新名・矢富・本間 (1992) は、ストレスサーとしての人間関係に焦点を当て、介護場面で生起する、抑鬱、不機嫌、怒りといったネガティブ感情の生起に人間関係が関与していることを明らかにしている。

くわえて、人間関係の役割そのものに着目して、介護負担感の程度との関連を検討した研究では、「良い」関係が望ましい効果を持つことを示しているものが数多く見られる。例えば、介護者と高齢者とが親しい関係にあるほど、対人葛藤の度合いが低いほど、両者間の愛情度が高いほど、情緒的に親密な関係にあるほど、また、コミュニケーションがうまく取れているほど、介護負担感が低くなる傾向がある(Cox, Parsons, & Kimboko, 1988; Pratt, Schmall, & Wright, 1986; Spaid & Barusch, 1994; Townsend & Franks, 1995; Williamson & Schulz, 1990)。また、家族関係が悪化することにより介護負担感が増大することを示した知見もある(吉田・南・黒田, 1997)。

さらに、人間関係が、介護者側ではなく高齢者側の心理に及ぼす効果の研究においても、高齢者の精神的健康状態に影響を与える要因としての役割が示唆されている。介護は高齢者にとってもストレスの高い状況であるが、良好な介護者と高齢者との関係は、介護される高齢者側の満足度も高めることが示唆されているのである。たとえば、周りへの依存が高まることから生じる自尊心の低下や不安、家族介護者の重荷になることへの恐れが、介護を受けるという事態により生起する可能性があるが、介護者との良好で親密な人間関係が、そのような過程を抑制し、高齢者の満足度を高める効果を持つことが示唆されている(Parsons, Cox, & Kimboko, 1989)。

これまで述べた介護負担感研究は、介護への否定的反応に焦点を当てたものであったが、肯定的態度を検討した研究でも人間関係の重要さが示唆されている。介護への肯定的態度研究は、それを構成する次元の探求を主たる目的としたものが多いが、西村、須田、Campbell、出雲、西田、高橋 (2005) は、介護充実感尺度の作成において、「介護役

割における自己達成感」とならんで、「被介護者との通じ合い」が因子を構成していることを示している。また、櫻井（1999）の作成した「介護肯定感尺度」でも、「介護状況への満足感」の項目では、「お年よりの世話を義務感からではなく、望んでしている」など、高齢者との良好な人間関係を前提とした項目が含まれている。したがって、被介護者との良好な関係が、介護をポジティブな体験にする重要な構成要素となっていると言える。

このように、良好な関係が介護負担の低減に望ましい効果を持つことを多くの研究が示しているが、では、良好な関係はどのような場合に得られるのだろうか。この問いについては、親子関係と介護に関する研究が、示唆を与える。Crispi, Schiaffino, & Berman（1997）は、老親を施設に入居させて介護に当たっている人達を対象にした調査で、性格特性としての愛着スタイルに着目して、介護の困難さの評価や心理的健康状態に与える影響を検討している。人は、ある特定の他者に対して強い結びつき、すなわち愛着を形成するが、幼少時から母親との快適な相互作用を持ち、必要に応じて親から適切な援助を与えられてきた人が、成人してからも安定した愛着スタイルを築くことが出来る（Bowlby, 1988）。このような人は、感情の調節機能に優れており、身体的、精神的健康度がたかく、他者との信頼関係を築くことが出来るのである。Crispi et al.（1997）の結果は、まさに、そのような安定した愛着スタイルの望ましい影響を示しており、そのようなスタイルを持つ人は、介護を困難であると考えられる程度が低く、より精神に健康な状態を保っていた。従って、安定した愛着スタイルに示されるような、親と良好で安定した関係を育んできた子供は、親の介護状況を悲観的にとらえる程度が低く、その結果、より精神的に健康な状態で親の介護に当たることができると示唆される。Crispi et al.（1997）は、親子関係のみを議論しているが、同様の考え方は他の関係にも敷衍できるだろう。介護者と被介護者との間の介護開始以前の相互作用での適切な支援の与え合いが、介護という支援場面での関係の良好さの基盤となっている可能性が考えられる。

3. 社会的支援研究

私たちが社会の中で生きていくには、さまざまな必要を満たさなければならないが、それは自分ひとりで可能なわけではなく、他者との関係から必要なものを得ることで、初めて可能となる。したがって、他者との関係を志向することは、社会的動物としての人間に組込まれた基本的な欲求であるとも言えることができるのだが、他者との関係からもたらされるさまざまな帰結によって、私たちの健康や幸せが左右されることも、必要な支援の有無という点から論ずることができる。親密な対人関係は、安らぎを得たり、アイデンティティの確認のために重要であり、いわば「安全基地」として機能することが言われており（Bowlby, 1988）、それは情緒面での支援であると同時に、他の支援の授受を可能にする基盤でもある。また、対人関係を多く持つ人は、健康であり幸福度が高いことが示され、これは、

各自の必要に応じた支援を得ることが出来るからだと論じられている（浦, 1992）。助け合い、支えあう行為は社会生活の基本であり、「さびしい人は早く死ぬ」ことを示した研究が示しているように、他者に支援されることは、精神的、身体的健康の維持のために、重要なのである（Berkman & Syme, 1979; House, Robins, & Metzner, 1982）。

高齢者介護と社会的支援の関係を論じた研究でも、同様の社会的支援の効果が示されている。介護場面では、主たる介護者を中心として、その周囲に二次介護者や他の家族や友人・知人を含んで形成される支援のネットワークを想定することができ、そうした支援ネットワークの中で、人間関係が介護者や介護されている高齢者に与える影響について検討されている。まず、ネットワークサイズが主たる介護者に及ぼす効果についての研究では、支援ネットワークが大きいほど、すなわち、さまざまな援助を与えてくれる人をたくさん持っているほど、介護負担を軽減することができ、その結果、身体的にも精神的にも介護負担を減らすことができるといふ知見が得られている（Noelker & Bass, 1994; Suito & Pillemer, 1993）。豊かなネットワークを持つ介護者は、道具的、情緒的、情動的支援を家族メンバーや友人から得ることにより、介護負担感やストレスを減少させるための「資源」を得ているのである（Cohen & Wills, 1985）。加えて、このような支援ネットワーク形成は、介護開始以前から個人が持っている人間関係に基づいて行われているがために、配偶者を介護する事態になったときに、一般に男性は親しい友人からの情緒的支援を受けられるようなネットワーク形成が困難であることも議論されている（Chappell, 1990; Fox, Gibbs, & Auerbach, 1985）。男性は、職場を中心とした友人関係を形成している一方、女性に比べると、居住コミュニティ内での友人ネットワークに乏しいためである。

また、社会的支援には、その種類として、道具的支援（物や金銭、実際の手伝いなどの提供による支援）、情緒的支援（励ましや、共感などの提供による支援）、情動的支援（知識やアドバイスなどの提供による支援）があるが、それらの中で、特に情緒的支援が介護ストレスの緩和には重要であることも示唆されている。藤野（1995）は、同居家族や親族からの情緒的支援が、介護者のストレス低減に最も重要であることを示している。これは、家族や友人が提供する情緒的支援が、他では代替できないものとなっていることの帰結でもあろう（古谷野・安藤・浅川・児玉, 1998）。情緒的支援は、普段からポジティブな態度を示しあえる人間関係が基盤となっており、その点からも、介護場面での社会的支援において、良好な人間関係の重要性が示唆される。すなわち、介護者がこれまでの人生で培っていた人間関係の良好さが介護開始後のストレスに大きく影響することが、ここでも示唆されるのである。

4. 良好な関係の問題点：介護への拘束の点から

ここまでは、良好な関係が、介護負担感の低減に寄与することで、精神的健康を促進する可能性を示唆する研究を

紹介してきた。しかし、いくつかの研究は、関係の良好さや緊密さが精神的健康に望ましくない影響を与えることを示唆している。まず、ひとつめとしては、親密な関係であると、そこで経験する感情が緊密になりがちであり、そのことがネガティブな影響をもたらす可能性に関する研究があげられる。親密な関係にあった家族が、介護を必要とする状態になった際の、家族の反応に焦点を当てた研究では、被介護者に対して心理的に近く感じていたり、愛着を感じているほど、介護者の鬱や不安が高くなることが示されている (Ronch, 1989)。さらに、親密な関係では、関係へのコミットメントが高まり、相手の幸福に対する責任感が生じるが、それが関係への拘束、ひいては介護への拘束に繋がるのが予測できる。

このような介護への拘束という過程については、家族介護意識に焦点を当てた研究知見からその存在が示唆されている。親密な家族関係が存在すると、高齢者に対して、自分達の手で世話をしたいとか、家族で介護すべきという意識が高まると考えられる。このような意識は、介護を継続していく動機付けの前提条件としては重要な態度であるが、家族介護者の精神的健康にネガティブな影響を与える可能性も示されているのである。唐沢 (2006) は、在宅で高齢者を介護している家族メンバーを対象に、家族介護意識が、鬱と介護継続意思に与える影響を検討した。その結果、家族介護意識は、介護を継続する意図に寄与する重要な要因であると同時に、鬱を増加させる要因となることを明らかにしている。家族として介護に対する責任感やコミットメントを持つことは、介護を行継続意図の規定要因として重要である一方で、介護の抱え込みの中で鬱が高まり、精神的健康が損なわれていく過程が存在し、家族という人間関係内での拘束がその背景に関与していることが示唆される。

また、介護サービス利用時のネガティブ感情やためらいについても、家族介護意識は影響する。杉澤、深谷、杉原、石川、中谷、金 (2002) は、在宅介護サービス利用が過少利用されていることについて、その規定要因を検討し、同居家族の存在、年収の低さと共に、介護者や被介護者が家族介護意識をもっていることが過少利用につながっていることを論じている。谷本 (2005) は、家族介護者の在宅ケアサービス導入の意思決定に関わる要因を検討し、介護をやりとおすことを美德とする規範の存在が、介護サービス導入の阻害要因となっていることを示している。また、家族介護意識と精神的健康、サービス利用の関係については、より直接的に、唐沢 (2001) が検討している。ホームヘルプサービス利用者による聞き取り調査を元にした分析からは、家族介護意識が、サービス利用に当たっての罪悪感や恥ずかしさの直接規定要因となり、これらのネガティブ感情がサービス利用のためらいに繋がるのが示されている。これらの研究結果は、家族介護意識が、サービス利用のためらいにつながることを通して、適切な支援を得にくくしていること、さらには、支援を得られないことにより精神的健康が阻害さえるという過程を明らかにしてい

る。またそれと共に、罪悪感や恥ずかしさといった感情を生じさせることによる、精神的健康へのネガティブな効果も示しているといえよう。公的介護サービスの利用は、介護者の身体的・精神的健康の維持に重要であるが (Ostwald, Hepburn, Caron, Burns, & Mantell, 1999)、仮にそうであっても、家族介護者がそれらを積極的に活用しながら介護を行なおうという態度を持たなければ、介護負担を緩和する効果は得られない。介護サービス利用を妨げる要因としては、経済的負担や希望にあうサービスが得られないなど、支援体制が整っていないことに由来する制度上の問題も、もちろん存在する。しかし、それだけではなく、家族介護者の態度のような心理的要因も重要であり、現場での対応の際に考慮すべき要因となることが研究から示唆されているのである。

これまでの議論をまとめると、介護負担をめぐる研究では、人間関係は、介護負担感をもたらすストレス要因となる一方、他の変数が負担感に与える影響の大きさを調整する要因として機能することが示されている。基本的には良い人間関係は、精神的健康に望ましい影響を与える。しかし、親しく緊密な関係から生まれる感情の緊密さは、介護場面で経験するネガティブ感情にも適用されるし、関係に対するコミットメントは、介護に拘束される状態につながるのである。

5. 不適切な支援のもたらす問題点

社会的支援についても、常に社会的支援を受けることが望ましい結果をもたらすわけではないことに注意が必要である。社会的支援研究では、期待と一致しない支援のネガティブな効果や、支援されることから生じる負債感や自尊心の低下といった問題が指摘されている (松浦, 2006)。日常の社会的交換関係の中には「返報性」の規範が作用しており、「与えられる」ことと「与える」ことの均衡が崩れることは望ましくないこととして認識される。「助けられる」ことは、与えられることであり、それに対して「返報」できなければ、返報性規範に反することとなり、心理的に負債感を背負うことになる。また、自らの必要に対応していない支援は迷惑であるにもかかわらず、支援者に対する負債が発生することになるので、かえって不快感が増大することにつながる。

このような社会的支援のネガティブな帰結は介護場面でも同様であり、不適切な支援によるストレスの増大や (Krause, 1995)、サービス利用に伴う罪悪感 (唐沢, 2001) が報告されている。2次介護者がおおむね役に立っていないという現状報告を鑑みれば (Penrod, Kane, Kane, & Finch 1995)、介護場面での必要をパーソナルなネットワークによる支援により充足しようとするには限界があるだけではなく、かえってストレス増大というネガティブな効果をもたらす可能性も示唆している。

また、支援内容の適切さの重要性を示す研究として、介護場面での支援が、介護が発生した後の人間関係の変化に与える影響に関するものをあげることができる。介護事態

の発生により、既存の人間関係がどのように影響されるのかを検討した研究において、兄弟姉妹関係については緊密度が変化し (Merrill, 1996)、夫婦関係においては満足度が変化するという知見が示されているが、変化の方向については、いずれも両方向の可能性が指摘されている。すなわち、介護により、関係が緊密になることも、疎遠になることもあるし、また、満足度が高まることも低くなることもある。そして、変化の方向を説明する変数として、両方の研究で「満足の行く支援の有無」があげられているのである。このような結果は、期待と実際に受ける支援のギャップや、支援に伴う情緒の交換という観点から解釈が可能であろう。すなわち、支援を得ること自体は、一般に関係をポジティブな方向に変化させる効果があるとしても、そこで得ている支援が期待以下であれば、失望を感じるし、また、支援している側も、「しているのに感謝してもらえない」ことに対して不満を感じるであろう。このようなネガティブな感情の経験そのものも、関係の質に望ましくない影響を与えるが、さらには、これらの感情の表出によっても、望ましくない影響が加速するであろう。支援するという行為が存在するにもかかわらず、緊密度や満足度の低下に繋がる結果になる背景には、このような認知過程や感情の交換過程が存在することが示唆される。

6. 行為の解釈過程の重要さ

これまで、介護負担感と社会的支援を取り上げて、高齢者介護場面での人間関係の影響を考えてきた。そして、望ましい人間関係を持っていることは、家族介護者の精神的健康を促進する方向で寄与することがおおむね示されている一方で、人間関係による拘束や不適切な支援がもたらす問題点があることを指摘してきた。介護場面における人間関係の質が、介護者の精神的健康に重要な要因であることには違いないが、今後の研究では、その影響の方向を決める過程についての考察が重要となってくる。したがって、最後に、介護場面が人間関係に基づく相互作用の場であるという視点から、単に、人間関係の質がポジティブ、またはネガティブな影響を与えるということを論ずるにとどまることなく、人間関係の役割を考察する上での重要な点として、行為の背景にある糸や傾性 (disposition) の推論に代表される「解釈」の過程に着目する必要性について指摘しておきたい。

これまで述べたさまざまな結果を解釈するに当たって、重要になるのは、人間関係に応じて、介護場面に関与する人たちが、他者の、または自分の行為をどのように意味づけるのかが変わってくるということ、そして、その意味づけの過程が、精神的健康に影響を与える可能性であろう。たとえば、介護負担感研究は、介護負担感が「高齢者からの感謝の欠如」で増加することを論じているが、それには、高齢者の言動を「感謝していない」と意味づける過程が不可欠である。同じ言動でも、そのような意味づけがなければ、負担感の源泉にはなり得ない。もちろん、特定の場面

での他者の気持ちの読み取りが、私たちの社会生活に大きな影響を持つことは、介護場面独自のことでない。社会的行動の「解釈のされかた」が相互作用の行方を決めるという日常場面の法則が、そのまま介護場面でも当てはまるということである。

したがって、介護場面を社会的相互作用の過程とみなす視点に立てば、日常の行動の解釈に見られる、さまざまな判断バイアスの影響について、介護場面でも検討していく必要が示唆される。たとえば、同じ行動を観察しても、好きな他者と嫌いな他者が行うのでは、その人の行動意図の解釈が異なり、好きであれば、好意的に解釈されるというバイアスが存在する (Karasawa, 2003)。そして、介護者が被介護者や他の家族の行為から読み取る「意図や気持ち」も、このような判断バイアスの結果として得られるものであり、互いに好意的な感情を持った人間関係の中で介護行為が行われれば、その行為の一つ一つから、思いやり、感謝、いたわりなど、ポジティブな意図や感情が読み取られることになる。しかし、その逆に、敵意的な感情を持った人間関係の中での介護であれば、行為からこのようなポジティブな意図や感情を読み取ることは難しいだろう。介護場面での人間関係は、このような認知過程に媒介されて、家族介護者の精神的健康に影響することが予測される。したがって、介護場面での人間関係の役割に着目するなら、今後、介護者の推論バイアスや、介護者の気持ちを高齢者や他の家族がどう理解するのか、また、介護者自身の解釈と、他者の解釈のずれはどうかと言う点を解明していく必要がある。

加えて、介護を「支援」にかかわる相互作用場面として捉えるなら、それに携わる介護者と被介護者の解釈のずれが問題となる。支援の授受には、ある人が支援を必要としているという認知が基本となるが、その際、支援者と被支援者間の認知差が明らかになっているからである。Karasawa (1995) は、ネガティブ感情表出の原因帰属を対象に、表出者と観察者の原因帰属の差異について論じている。一般に表出者は、ネガティブ感情の原因となった望ましくない出来事のせいで、自分がそのような感情を表出していると解釈し、他者に共感や支援を期待する。しかし、観察者は、表出者のネガティブな態度や性格に帰属しがちなため、表出者への共感や支援的態度が抑制され、むしろ、非難的な態度も表れるのである。言い換えれば、苦境にあったとき、当事者はその原因を状況要因に帰属し、経験している苦しさを表出して、そのことにより、他者が助けを差し伸べてくれることを期待する。その一方、他者は、当事者ほどには苦境の原因を状況にあるとはみなさず、むしろ、当事者の苦しみの表出を本人の態度や性格に帰属してしまうため、支援提供意図が低下するのである。このような両者の原因帰属の差異、そして、帰属に基づく相手に対する対人態度の差異は、支援場面において、ネガティブな相互作用が展開されるシナリオが、その背景にある社会的認知過程に支えられていることを示している。介護場面でも、社会的認知過程が相互作用に及ぼす影響に焦点を当

てて、同様の過程の存在を検証するような研究が必要とされる。

6. まとめ

介護場面では、確かに、介護者と高齢者の良好な関係が、負担感の点からも支援ネットワークの点からも望ましい効果をもたらすことが示されている。したがって、どうすれば良好な関係を築くことができるのかという問いが出てくるが、これについては、もちろん、介護場面に限らず、簡単な処方箋はない。介護が始まったから急に関係が良くなるということはありません、既存の関係をそのまま引きずり、介護に突入することがほとんどであることを考えれば、介護以前の間人関係が重要になってくるだろう。したがって、その影響を明らかにする研究知見を重ねることで、介護者の精神的健康の維持・向上に向けての実際的な提言へとつなげることができよう。加えて、良好な関係や豊かなネットワークの落とし穴を知ることも重要であろう。人間関係の影響を考える上では、介護者と被介護者が、お互いの行為を解釈する過程に着目することが重要であり、介護場面での社会的認知過程の検討に基づき、介護者の精神的健康を考察していく必要があるだろう。

引用文献

- Berkman, L.F., & Syme, S.L. 1979 social networks, host resistance, and mortality: A nine-year follow-up study of Alameda county residents. *American Journal of Epidemiology*, **115**, 684-694.
- Bowlby, J. 1988 *A secure base: Parent-child attachment and healthy human development*. New York: Basic Books.
- Chappell, N.L. (1990). Aging and social care. IN R.H. Binstock & L.K. George (Eds.), *Handbook of aging and social sciences* (3rd ed., pp.438-454). New York: Academic Press.
- Cohen, S., & Wills, T.A. 1985 Stress, social support, and the buffering hypothesis. *Psychological Bulletin*, **98**, 310-357.
- Cox, E.O., Parsons, R.J., & Kimboko, P.J. 1988 Social services and intergenerational caregivers: Issues for social work. *Social Work*, **33**, 430-434.
- Crispi, E.L., Schiaffino, K., & Berman, W.H. 1997 The contribution of attachment to burden in adult children of institutionalized parents with dementia. *The Gerontologist*, **37**, 52-60.
- Dakof, G.A., & Taylor, S.E. 1990 Victims • perceptions of social support: What is helpful from whom? *Journal of Personality and Social Psychology*, 53-80.
- Fisher, J.D., Nadler, A., & Whitcher-Alagna, S 1982 Recipient reactions to aid. *Psychological Bulletin*, **91**, 27-54.
- Fox, M., Gibbs, M., & Auerback, D. 1985 Age and gender dimensions of friendship. *Psychology of Women Quarterly*, **8**, 489-501.
- 藤野真子 1995 在宅痴呆性老人の家族介護者のストレス反応に及ぼすソーシャルサポートの効果 *老年精神医学雑誌*, **6**, 575-581.
- Homans, G.C. 1974 *Social behavior: Its elementary forms*. Harcourt Brace Jonanovich.
- House, J.S., Robins, C., & Metzener, H. 1982 The association of social relationship and activities with mortality: Prospective evidence from the Tecumseh Community Health Study. *American Journal of Epidemiology*, **116**, 123-140.
- 唐沢かおり 1998 高齢者介護労働での人間関係をめぐって: 対人相互作用としての介護 *産業・組織心理学研究*, **12**, 17-27.
- 唐沢かおり 2001 高齢者介護サ - ビス利用を妨げる家族介護者の態度要因について *社会心理学研究*, **17**, 22-30.
- 唐沢かおり 2006 家族メンバーによる高齢者介護の継続意志を規定する要因 *社会心理学研究*, 172-179.
- Karasawa, K 2003 Interpersonal reactions toward depression and anger. *Cognition and Emotion*, **17**, 123-138.
- Karasawa, K. 1995 An attributional analysis of reactions to negative emotions. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **21**, 456-467.
- 古谷野亘, 安藤孝敏, 浅川達人, 児玉好信 1998 地域老人の社会関係にみられる階層的補完 *老年社会科学*, **19**, 140-150.
- Krause, N. 1995 Negative interaction and satisfaction with social support among older adults. *Journal of Gerontology: Psychological Sciences*, **2**, 59-73.
- Kushner, M.G., & Sher, K.J. 1991 The relation of treatment fearfulness and psychological service utilization: An overview. *Professional Psychology: Research and Practice*, **22**, 196-203.
- Lazarus, R. S., & Folkman, S. (1984). *Stress, appraisal and coping*. New York: Springer.
- 松浦均 2006 援助行為についての援助者側の被援助者側との認識の違い *当会心理学研究*, **2**, 3-19.
- Merrill, D.M. 1996 Conflict and cooperation among adult siblings during the transition to the role of filial caregiver. *Journal of Social and Personal Relationships*, **13**, 399-413.
- Montgomery, R. J. V., Gonyea, J. G., & Hooyman, N. R. 1985 Caring and the Experience of Subjective and Objective Burden. *Family Relations*, **34**, 19-26.
- 新名理恵, 矢富直美, 本間昭 1992 痴呆性老人の在宅介護者の負担感とストレス症状の関係 *心身医学*, **32**, 324-329.
- 西村昌記, 須田木綿子, Ruth Campbell, 出雲祐二, 西田真寿美, 高橋龍太郎 2005 介護充実感尺度の開発; 家族介護者における介護体験への肯定的認知評価の測定, *厚生*の指標, **52**, 8-13.
- Noelker, L.S., & Bass, D.M. 1994 Relationship between the frail elderly's informal and formal helpers. In E. Kahana, D.E. Biegel, & M.L. Wykle (Eds.), *Family caregiving across the lifespan* (pp.356-381). Thousand Oaks, CA: Sage.
- Ostwald SK, Hepburn KW, Caron W, Burns T, and Mantell R. 1999 Reducing Caregiver Burden: A Randomized Psychoeducational Intervention for Caregivers of Persons with

- Dementia. *Gerontologist*, **39**, 299-309.
- Parsons, R.J., Cox, E.O., & Kimboko, P.J. 1989 Satisfaction, communication and affection in caregiving: A view from the elder's perspective. *Journal of Gerontological Social Work*, **13**, 9-20.
- Pearlin, L. I., Mullan, J. T., Semple, S. J., & Skaff, M. M. 1990 Caregiving and the stress process: An overview of concepts and their measures. *The Gerontologist*, **30**, 583-594.
- Penrod, J.D., Kane, R.A., Kane R.L., & Finch, M.D. 1995 Who cares? The size, scope, and composition of the caregiver support system. *The Gerontologist*, **35**, 489-497.
- Pratt, C., Schmall, V., & Wright, S. 1986 Family caregivers and dementia. *Journal of Contemporary Social Work*, **67**, 119-124.
- Ross, C.E., Mirowski, J., & Goldsteen, K. 1990 The impact of the family on health: The decade in review. *Journal of Marriage and the family*, **52**, 1059-1079.
- Ronch, J.L. 1989 Alzheimer's disease. *A practical guide for families and other caregivers*. New York: Crossroads /continuum Publishing Group.
- 櫻井成美 1999 介護肯定感がもつ負担軽減効果 心理学研究, **70**, 203-209.
- Spaid, W.M., & Barusch, A.S. 1994 Emotional closeness and caregiver burden in the marital relationship. *Journal of Gerontological Social Work*, **1**, 197-211.
- Strobe, M.S., & Strobe, W. 1983 Who suffers more? Sex differences in health risks of the bereaved. *Psychological Bulletin*, **93**, 279-301.
- 杉澤秀博, 深谷太郎, 杉原陽子, 石川久展, 中谷陽明, 金恵京 2002 介護保険制度下における在宅介護サービスの過少利用の要因 日本公衆衛生雑誌, **49**, 425-436.
- Suitor, J.J., & Pillemer, K. 1993 Support and interpersonal stress in the social networks of married daughters caring for parents with dementia. *Journal of Gerontology: Social Sciences*, **48**, S1-S8.
- Suitor, J.J., & Pillemer, K. 1994 Family caregiving and marital satisfaction: Findings from a 1-year panel study of women caring for parents with dementia. *Journal of Marriage and the Family*, **56**, 681-690.
- 谷本千亜紀 2005 要介護高齢者を介護する家族介護者の在宅ケアサービス導入における意思決定プロセスと要因 日本看護学会誌, **14**, 61-68.
- Townsend, A.L., & Franks, M.M. 1995 Biding ties: Closeness and conflict in adult children's caregiving relationships. *Psychology and Aging*, **10**, 343-351.
- 浦光博 1992 支えあう人と人—ソーシャルサポートの社会心理学—サイエンス社.
- Willamson, G.M., & Schulz, R. 1990 Relationship orientation, quality of prior relationship, and distress among caregivers of Alzheimer's patients. *Psychology and Aging*, **5**, 502-509.
- 吉田久美子, 南好子, 黒田研二 1997 要介護高齢者の介護負担感とその関連要因. 社会医学研究, **15**, 7-13.
- Zarit, S. H., Reever, K. E., & Bach-Peterson, J. 1980 Relatives of the impaired elderly: Correlates of feelings of burden. *The Gerontologist*, **20**, 649-655.

(受稿 : 2009 年 2 月 25 日 受理 : 2009 年 3 月 9 日)